

第8回

立体

～立体という面白さ～

美術教育監修・執筆

上野行一

私たちは何かに心を動かされて絵や立体に表現しようとする。自分の表したいこと（主題）を立体に表すときに大切なことは何だろう。それは素材とつくるプロセスによって異なるのだろうか。今回は立体表現について、発想を広げて見立てることや、表したいものの特徴を生かし想像力豊かにつくることなど、その魅力について学ぶ。

学習前
チェック!

立体表現は幅広い。素材も多様、制作意図も作家によってさまざまにひと言で説明するのは困難だ。そのため、偏った理解や思い込みをしていないだろうか。自分は今までどのように立体作品に接してきたかを振り返っておこう。

発想を広げて見立てる

ニューヨーク近代美術館の人気作品のひとつであるパブロ・ピカソ作《Tête de taureau》（1942年）は、非常にシンプルな形態で牡牛の頭部を立体表現している。しかし近づいてよく見ると、この作品が自転車のサドルとハンドル絶妙な組み合わせであることがわかる。

このように物本来の外観や意味、役割を他の物になぞらえて表現することを日本では見立てと称し、造形のみならず俳諧、演劇、作庭、生け花など、芸術の多様な分野でその美学が継承されてきた。レオナルド・ダ・ヴィンチもその著者『絵画論』で称賛しているように、古今東西見立ては発想を広げる手法として関心をもたれてきたのだ。

立体表現の魅力

立体作品にはいろいろな味わい方がある。作者の想像力と工夫によって作りだされた作品のおもしろさや美しさを、まず素直に味わってみよう。鉄でつくられたリンゴのような主題と素材の意外性や、ガラスの特性を生かした作品など表現と材料との関連を味わうのもよい。360度さまざまな視点や視角から眺めて味わうのもよいだろう。

しかし鑑賞の醍醐味は、このような感覚的な味わいや外観の味わいを通して、その作品が何を意味しているのかと自問自答すること、つまり自分との関係で味わうことにある。自分にとってその作品がどのような意味や価値があるのかという見方も大切。どこに置くとよいだろうかと、場所や空間と作品の関係について思いを馳せるのも深く味わうコツである。



● ゼロからつくり出す立体

木などから形を彫り出していく場合には、最初から明確な仕上がりのイメージが必要になる。逆に、陶芸のように盛り付けて形をつくる場合には、粘土で成形しながら仕上がりを想像したり、つくりながら考えたりすることができる。

前々項で触れたように、素材の形や感じを何かに見立てて、そのイメージをもとにつくってもよい。用いる素材とつくるプロセスによって造形のアプローチは変わってくるが、自分の表したいこと（主題）をいかに形に表すかという制作態度が大切であることに変わりはない。



Handwriting practice lines consisting of 20 horizontal dotted lines.